

論文の要旨

論文題目 「メトニミーの認知言語学的研究
非自立型メトニミーを中心にして

氏名 山本 幸一

学位 博士(文学)

授与年月日 平成20年3月25日

本論は、人間が現実世界をどのように知覚・認知しているかという捉え方(construal)を基盤にして言語が成立していると捉える認知言語学(Cognitive Linguistics)の言語観に基づいた「メトニミー(metonymy)」の研究である。認知言語学では、言語は認知能力の発現であり、語彙も文法も「形式と意味との組み合わせ(form-meaning pairings)」であるとする「記号体系としての文法(the symbolic view of grammar)」という立場を取っている。この立場では、言語は人間が世界を概念化する仕方を反映しており、言語の意味は認知主体の概念化(conceptualization)であり、言語は意味的に動機づけられ(motivated)、大方において説明可能(accountable)であるとみなされている。この立場では、メタファー、メトニミー等の比喩は大変重要な分析対象である。

本論の議論は大きく2つから成っている。第1に、メトニミーが異なった振る舞いをする2つのタイプに下位区分されることを明らかにし、その一方のタイプを「自立型メトニミー(Independent Metonymy)」と名づけ、「関連性(relatedness)」という特徴をもつこと、他方のタイプを「非自立型メトニミー(Dependent Metonymy)」と名づけ、「意味の2層構造(Dual Construction of Meaning)」という特徴をもつことを明らかにした。また、両メトニミーの成立を過不足なく説明する成立条件を明らかにした。第2に、先行研究がいろいろな方法で説明を試みてきた「形式と意味の不一致」を示す5つの構文である、「ウナギ文」、「主要部内在型関係節構文」、「介在性表現」、「転移修飾現象」、「Tough 構文」について、それらが「非自立型メトニミー」であることを明らかにし、それらについて統一的な説明が可能になることを明らかにした。以上が、本論の議論の概略である。各章の概要は以下の通りである。

第1章では、比喩についての認識の変遷を見た。Lakoff and Johnson (1980)の *Metaphors We Live By* の出現以来、メタファー、メトニミーをはじめとする比喩の研究が、言語のみならず人間の概念のありさまを探る重要な研究対象となったこと、また、「類似性(similarity)」、「隣接性(contiguity)」による意味拡張であるメタファー、メトニミーが言語活動や認知のありさまに大きな影響を与えていることを見た。そして、メトニミーとメタファーの特徴、文学作品と日常の言語表現におけるメトニミーの具体例を眺め、本論の構成について概観した。

第2章では、人間が外界をどのように知覚・認知しているかという捉え方を基盤にして言語が構成されていると主張する認知言語学、特に Langacker による認知文法(Cognitive Grammar)に基づいて本論の分析がなされていることから、認知言語学の言語観及び基本的概念について見た。言語観と意味観については、認知言語学を生成文法と対比して、その特徴を浮き彫りにした。基本的概念については、「認知(cognition)」、「一般認知能力(general cognitive ability)」をはじめとして、本論で扱う概念を9項目にわたって説明した。

第3章では、メトニミーの先行研究について、メタファーと対比しながら、4つの分類に従って見た。佐藤(1992[=1978])等の分析では、メトニミーを「隣接性による意味拡張」、Lakoff (1987)等では、「同一概念領域内での意味拡張」、Langacker (2000)では、「参照点構造」、西村(2002)等では、「焦点移動」と捉えていることを見た。これらの先行研究において、メトニミーは言葉の問題から概念や思考の問題へ、そして構文・文法の問題にまで広範に浸透している現象とみなされていることを見た。

第4章では、第5章でメトニミーを2つに区分することになる一方のタイプである(1)のような「自立型メトニミー」について詳細な分析をした。

(1) 赤ずきん(赤ずきんを着用した女の子)がやって来た。

先行研究では、メトニミーの成立条件としての的確な定義が提案されていないことを指摘した後、メトニミーの定義として「関連性」による定義を提案し、メトニミーを過不足なく説明する的確な成立条件を明確に示した。「関連性」とは、ソースとターゲットが、「特徴」と「主体」という関係として捉えられることである。(1)については、「着用物」である「赤ずきん」という特徴で、それを着用している女の子を捉えている。この場合、他の人間から女の子を識別していると言うことができる。メトニミー成立の条件は、「ターゲットである対象を、同種の他の対象から識別できること」であり、それには、ソースがターゲットに対して識別可能な特徴(識別特徴)である必要がある。「識別特徴」であるためには、第1に、他と識別できる詳しい特徴が必要である。第2に、そのような識別を可能にするために、例えば(1)では、「村の人々」というように、対象を識別するための母体となる制限された集合が必要となる。この制限された集合を「識別母体」と名づけた。

(2)は「土地 機関」のメトニミーとして成立するが、ソースとターゲットを逆にして「機関 土地」とした(3)のメトニミーは成立しない。また、(4)は「土地 機関」のメトニミーを意図しても成立は難しい。

(2) ワシントン(米国政府)とモスクワ(ロシア政府)の交渉

(3) *私が訪れたいのは米国政府(ワシントン)だ。

(4) *訪米中の文部大臣は、1日目はメトロポリタン美術館を訪れ、2日目にはワシントン(米国政府)を訪れる予定である。

「隣接性」に基づく分析では、メトニミーのソースとターゲットを逆にした(3)のメトニミーがなぜ成立しないのか説明ができない。また、「参照点構造」に基づく分析では、(3)は説明できても、「土地 機関」のメトニミーとして(4)が成立しないことが説明できない。

しかしながら、本論の「関連性」の定義によれば、(3)は「識別特徴」、(4)は「識別母体」の条件が満たされないために成立しないと説明ができる。先行研究における「隣接性」という概念については曖昧な点が見られるため、第4章では、更に、「空間的隣接性」と「概念的隣接性」の関係を整理して明確にした。

第5章では、メトニミーの振る舞いを検討し、メトニミーが一枚岩ではなく、大きく2つのタイプに分かれることを明らかにした。

(5) 長髪がやって来る。

*それ(長髪)は長いね。

彼(青年)は背が高いね。

(6) 風車が回っている。

それ(風車)は、オランダ製だ。

*それ(羽根)は、4枚ある。

2つのタイプの振る舞いの違いの1つに、代名詞の照応がある。(5)のタイプはターゲット(拡張した意味)と照応し、(6)のタイプはソース(字義の意味)と照応している。(5)のようなタイプを「自立型メトニミー」、(6)のようなタイプを「非自立型メトニミー」と名づけた。

一方のタイプである「自立型メトニミー」については、第4章で詳細に分析したが、もう一方のタイプである「非自立型メトニミー」については、「ある概念と、他の概念を結びつける時に、そのある概念と直接関係する対象として、別の概念にアクセスする」認知能力であることを明らかにした。(6)については、「風車」と「回る」が結びつき、「風車全体としての稼働」という意味が生じるが、それとは別に、「回る」は、直接関係する対象として、「羽根」にアクセスしている。これが「非自立型メトニミー」のメカニズムであり、この2層の意味を、「意味の2層構造」と呼んだ。1層目の意味は、「言語表現の伝達内容」である。そして2層目の意味は、「推論により1層目の意味を補完する意味内容」であり、「述語が直接関わる対象」が、言語表現の置かれた文脈から推論されるというメカニズムに基づいている。

第6章では、この「非自立型メトニミー」について、詳細に議論した。「非自立型メトニミー」には「全体 部分」の型が多く見られるが、(7)のような「容器 内容物」、(8)のような「主体 道具」等いくつかの型が見られる。

(7) やかんが沸いている。

(8) I am parked out back.

本論では、これら種々の型の中心に共通する特徴が存在することを「対象の拡張」という概念を導入することによって明らかにした。「対象の拡張」とは、「ある対象」が、「別の対象」を「部分」として包含し、一体化して「全体」として捉えられることを指す。「対象の拡張」によって、「非自立型メトニミー」のすべてを、「全体 部分」の型として統一的に説明することが可能になった。「対象の拡張」の要因としては、2種類がある。1つは、「ある対象が別の対象に対して従属的状态にあり、両者が一組になって1つの機能を果たす」場合に捉えられる「総体としての認識」である。もう1つは、生態心理学が主張する

「エコロジカル・セルフによる自己知覚」の関係する「生身の身体を超えて空間的に広がりが得ると捉える認識」である。この2つが「対象の拡張」の要因であることを議論した。「対象の拡張」によって、様々な型が、「全体 部分」の型として、統一的に「非自立型メトニミー」として分析されることを明らかにした。(7)では、「やかん」と「湯」が「総体として認識」されている。(8)では、「私」が「自動車」を道具のように取り込んで一体化している。

自立型メトニミーと非自立型メトニミーの定義を以下に対比してみよう。

A. 自立型メトニミー(Independent Metonymy) :

外界の2つの事物間、あるいは2つの概念間に「関連性」が捉えられる場合、一方の事物・概念を通して、他方の事物・概念を捉える認知能力を「自立型メトニミー」と呼ぶ。

B. 非自立型メトニミー(Dependent Metonymy) :

外界の「ある対象A」とその「状態や動きB」を結びつける時、あるいは、「ある概念A」と、「他の概念B」を結びつける時に、その「状態や動きB」あるいは、その「概念B」と直接関係する「他の対象C」、あるいは、「他の概念C」にアクセスする認知能力を「非自立型メトニミー」と呼ぶ。

自立型メトニミーと、非自立型メトニミーの意味構造を以下に対比してみよう。

A. 自立型メトニミー :

例：長髪がやって来る。

指示対象	ソース	ターゲット
	(長髪(地))	(青年(図))

B. 非自立型メトニミー :

例：風車が回っている。

1層目：指示対象	(風車(図))	/	(羽根(地))
2層目：述語と直接関わる対象	ソース		ターゲット
	(風車(地))		(羽根(図))

非自立型メトニミーの「意味の2層構造」は次のようにまとめることができる。

1層目の意味： 言語表現の伝達内容は、「(拡張された)全体」としての「対象」についての叙述である。

2層目の意味： 述語が直接関係するのは対象の「部分」である。

この「意味の2層構造」によって「非自立型メトニミー」の成立条件も明らかになった。(9)(10)の成立の可否についての説明については、以下のように提案した。

(9) I am in the Whitney.

(10)??I am in the second crate on the right.

「非自立型メトニミー」として(9)が成立し、(10)が成立しない理由は、1層目の叙述が有意義なものであるかどうかという点から説明できる。2層目の意味については、(9) (10)

のいずれも、述語がアクセスするのは、主語である人物の「作品」であると推論される。しかし、1層目については、(9)では、「美術館への作品の展示という名誉」という「主体」にとって有意義な叙述であるが、(10)では、「作品の木箱への保管」という「主体」にとって有意義な叙述ではないことが「非自立型メトニミー」成立の可否の違いの原因である。「非自立型メトニミー」が成立するには、1層目の意味が有意義であるという動機づけが必要であるが、(9)には動機づけがあっても、(10)にはない。

第7章から第11章では、6章で明らかにした「非自立型メトニミー」によって、「形式と意味の不一致」という性質をもつ5つの構文についての説明を個別に検討した。

第7章では、「ウナギ文」として従来知られる(11)のような「名詞述語文」について分析した。

(11) ぼくはうなぎだ。

一見非論理的なこの構文については多くの先行研究があるが、基底文からの変形、省略としての分析については、変形や省略の結果生成されるウナギ文と基底文という意味の異なった2つの構文を結びつけることが問題であることを指摘した。本論では、変形、省略という分析を取らず、「非自立型メトニミー」の「意味の2層構造」によってウナギ文の性質を明らかにした。先行研究では明らかにされていない言語現象に、「対比が想定される文脈で容認され易いこと」がある。(12)が示しているように、ウナギ文は対比が想定されない文脈では成立が難しい。

(12) ウェイター : ご注文はどういたしましょう？

客 : 私はうなぎを頂きます。/*私はうなぎです。

本論での「非自立型メトニミー」の分析では、「意味の2層構造」のうち、ウナギ文の1層目の意味について、伝達内容が「対応関係」の叙述であると説明できるため、複数の対応が想定される文脈で容認され易い言語事実に自然な説明が可能である。

第8章では、(13)のような「主要部内在型関係節構文」について分析をした。

(13) [りんごがテーブルの上にあった]のを取って食べた。

形式上は、主節述語は関係節事態全体を項として取っているが、意味上は、関係節事態の一部を項として解釈している。この「主要部内在型関係節構文」の「2重性」をどのように説明するのか、という点が解決すべき問題である。また、関係節事態は、主節事態と関わりがあるが、このような意味的制約の根拠はどのように説明されるのか、という点も問題点である。これらの問題点に対して、本論の主張を次のように行った。「2重性」については、「主要部内在型関係節構文」は、「意味の2層構造」を持つ「非自立型メトニミー」であることによって説明が可能である。「関係節事態」と「主節事態」との関わりが生起することについては、「主要部内在型関係節構文」が「非自立型メトニミー」であれば、「意味の2層構造」の1層目の意味によって自然な説明が可能である。また、次の2点についても明らかにした。「主要部内在型関係節構文」の「関係節」と同じ形式を持つ「動詞補文」を含む文との違いは、焦点化する部分の違いであり、相対的なものである。「主要部を欠く

主要部内在型関係節構文」は、「関係節」自体が「非自立型メトニミー」となっており、このターゲットが主節の「非自立型メトニミー」に継承されたものであると主張した。

第9章では、(14)のような「介在性表現」について分析した。

(14) 秀吉は大坂城を建てた。

「行為者(被使役者)」とその「行為」が脱焦点化され、主語が表す「使役者」と「事態」が焦点化されるという相関的な構造とこの表現の成立条件を明確にした。「エコロジカル・セルフとしての自己知覚」を要因とする「対象の拡張」によって、「支配者」が「被支配者」を、心理的に、まるで道具と捉えて、内部に取り込んで「対象の拡張」をするのが、「非自立型メトニミー」としての介在性表現であると分析した。先行研究では説明ができていない言語事実に、主語に動物や無生物がくることがあるが、この説明として、「起因力」によって「事態」が引き起こされるという意味構造を明確にした。意志的に支配力を行使できない主体であっても、原因となって事態を引き起こす力を持つと捉えることは可能であり、これが「起因力」である。「介在性表現」の成立条件は次の2つであると主張した。

- A. 「使役・被使役のスキーマ」の該当する叙述対象が社会的に慣習化している程度が高い場合
- B. 「事態」の捉え方ができる場合(「被使役者」と「行為」が脱焦点化できる場合)

第10章では、(15)のような「転移修飾現象」について分析を行った。

(15) He lay all night on his sleepless pillow.

(15)の文は、言葉の表面を見る限りでは、“sleepless”が“pillow”を修飾する形を取っている。しかし、“sleepless”が“pillow”を説明していると通常解釈することはない。“sleepless”が説明しているのは、“pillow”に頭を乗せて、横たわっている“he”である、とするのが自然な解釈である。本論では従来転移修飾語と呼ばれてきた言語表現に限らず、修飾要素と被修飾要素が、形式と意味のすれ違いを引き起こしている言語現象を広く考察対象として、なぜそのような形式と意味のすれ違いが生起するのかについて、認知言語学的視点からその認知メカニズムを探った。そして、転移修飾現象を意味の2層構造をもった非自立型メトニミーであると捉えた。言語表現の伝達内容である「関与対象」についての修飾要素による説明」と「修飾要素が直接関係するのは対象の「関連概念」としての「関与者」である」という「意味の2層構造」を明らかにした。また、「修飾要素」と「関与対象」の関係を分析し、両者の関係に少なくとも4タイプがあり、「原因型」₁、「表出型」₂、「投影型」₃、「容器型」と名づけ、その意味構造を明らかにした。

第11章では、(16)のような英語の「Tough構文」について分析した。

(16) John is easy to please.

Langacker(1995)が提案している「参照点構造」₁、「アクティブゾーン・プロファイルの不一致」としての分析について2つの問題点を指摘し、その代替案として「非自立型メトニミー」による分析を行った。「主語の名詞句が、不定詞の目的語としての意味も兼ねているという2重性」₂、そして、「行為について叙述する意味を持っている形容詞が、モノである

名詞句を主語として取る意味の不整合」という2点の問題点について、以下のように自然な説明が可能になった。「言語表現の伝達内容は、「(拡張された)全体」としての「行為対象」についての叙述である」という1層目の意味から、「対象」が叙述されるべき「文の主語」となる。また、「行為対象」と捉えられることから、「不定詞の目的語」を兼ねることになる。このように、2重性が説明できる。また、「述語形容詞が直接関係するのは対象の「部分」(関連概念)としての「行為」である」という2層目の意味から、意味の不整合は生じないと説明できる。

以上のように、本論では、メトニミーが異なったメカニズムに基づく2つのタイプである「自立型メトニミー」と「非自立型メトニミー」に下位区分されることを明らかにし、その後、両メトニミーについて詳細な分析を行った。そして、一方のタイプである「非自立型メトニミー」によれば、「形式と意味の不一致」をもつ5つの構文について自然な説明が可能になることを明らかにした。